

ネット座談会 平成30年5月10日～平成30年9月5日

# 「女性活躍×特許情報業界」

～特許情報業界のこれからに向けて～

Patent information industry in which women shine



**菅原 好子**

三井化学株式会社  
研究開発企画管理部  
インテリジェンスグループリーダー



**都築 泉**

HIT サービス研究所 代表



**中村 栄**

旭化成株式会社  
研究・開発本部 知的財産部  
知財戦略室長  
プリンシパルエキスパート



**酒井 美里**

スマートワークス株式会社  
代表取締役

## はじめに

### ■ 進行：Japio YEAR BOOK 出版事務局

今回は、一般財団法人日本特許情報機構（以下、「Japio」）が事務局として2012（平成24）年から実施しております「特許情報普及活動功労者表彰」で特許

庁長官賞を受賞された個人の方4名から、女性活躍と特許情報業界をテーマに、バーチャル形式で対談（ネット座談会）を頂けることとなりました。特許情報業界のこれからに向けたヒントが得られればと思っております。まずは、自己紹介をお願いいたします。

## ■ 菅原

私が平成 26 年度度特許情報普及活動功労者表彰「特許庁長官賞」をいただいたのは、2015（平成 27）年 2 月 25 日でした。その後、会社からプレスリリースでの発表<sup>1</sup>があり、社内外に広く知られることとなったことから、多くの方々からお祝いの言葉をいただき、この賞の重みを実感したことが、昨日のこのように思い起こされます。

私は、入社以来、まさに「特許情報」に携わる仕事を多く行ってきました。社内での業務もそうですが、同時に、対外活動もいろいろと経験させていただきました。

私の対外活動は、1996 年に JIPA（日本知的財産協会）知的財産情報委員会に参加させていただいたのが始まりでした。同委員会においては、各企業の方々との知的財産情報に関する共通課題についての調査研究や提言などの活動をさせていただき、2001 年度は委員長として活動しました。

また、特許庁の「途上国支援工業所有権人材育成協力事業」（発明協会）に関するプログラムにおいて、特にアジア諸国からの海外研修生の皆様に、特許情報調査関係の教育や現地でのセミナーの講師等の機会をいただきました。

さらに、「特許検索競技大会」（当初 INPIT（独立行政法人工業所有権情報・研修館）、のち IPCC（一般財団法人工業所有権協力センター）が主催）の実行委員会の委員（2008～2011 年度）、委員長（2012 年度～2014 年度）として参画し、大会の運営方針・出題問題作成・評価採点等に関わり、「特許調査従事者の現状と今後に関する調査研究」での議論やその報告を踏まえ、大会運営の改善等にも取り組ませていただきました。2013 年度より、学生や研究者を対象とした「ベーシックコース」の創設や、認定制度や団体戦の導入に取り組む事により、大会の参加者が大きく増加しました。

これらの活動を通して、特許情報に関わる人を育て、また、インセンティブ向上につながる認定や表彰の場づくりができ、特許情報の世界に関連する皆様に、少しなりとも貢献できたことを評価いただいたのであれば、望

<sup>1</sup> [https://www.mitsui-chem.com/jp/release/2015/2015\\_0226.htm](https://www.mitsui-chem.com/jp/release/2015/2015_0226.htm)



## 菅原 好子

三井化学株式会社  
研究開発企画管理部  
インテリジェンスグループリーダー

1985 年 4 月 三井化学（旧三井東圧化学）株式会社入社、知的財産部（特許部）特許調査担当  
2007 年 7 月 知的財産部情報調査センターユニットリーダー  
2012 年 4 月 知的財産部副部長  
2016 年 4 月 次世代事業開発室副室長  
2017 年 4 月 R&D 戦略室インテリジェンスグループリーダー  
(対外活動)  
2001 年度日本知的財産協会知的財産情報検索委員会委員長、特許庁（発明協会）JPO/IPR 研修講師、INPIT 特許検索競技大会実行委員会委員など、知的財産情報関連の各種公的活動に参画。

外の喜びです。

現在は、当社に昨年 4 月に発足したインテリジェンスグループのリーダーとして、これらの経験を踏まえ、特許情報を含む各種情報を活用し、未来に向けて、今、何をすべきかを洞察し、新たな事業開発や新製品開発のためのテーマ創出に関わる業務を行っているところです。

## ■ 都築

私が特許情報に関わったルーツは、社会人としてはじめて勤務した丸善株式会社で Dialog（現：Proquest Dialog）のサービスに関わったことです。当初は科学技術系のデータベースサービスが中心でしたが、徐々に特許情報が注目されるようになりました。その流れの中で、米国特許情報データベースに関わる仕事を通じて特許情報に関心を持ち、特許事務所に転職しました。特許事務所で得た特許実務に関する知識・経験は、大いに有用なものであったと今でも思います。その後、再び特許情報業界へと舞い戻り、株式会社 KMK デジテックスから株式会社ジー・サーチへと仕事の場は移り、さらに 2005 年から大阪工業大学の知的財産研究科で勤務し、知財情報を学生に教えることになりました。結果的に数回転職しましたが、そのおかげで異なる立場で仕事をしているの方々、業種の違う多くの方々を知り合うことがで



都築 泉

HIT サービス研究所 代表

1980年5月より丸善株式会社にて海外データベースサービスに従事。その後、特許事務所勤務を経てデータベース業界に復帰。2005年4月から大阪工業大学知的財産研究科に勤務。退職後、HIT サービス研究所を設立、現在に至る。特許情報検索能力評価のための実行委員会、情報科学技術協会情報検索能力認定試験作業分科会等で活動。2015（平成27）年度特許情報普及活動功労者表彰特許庁長官賞を受賞。

き、自分にとってのかけがえのない財産となりました。

情報の世界では人の輪の広がりや大事ですので、それぞれの仕事の場で、できるだけユーザー会や研究会活動に参加しました。

特許検索競技大会に関しては、任期の最後のころに、それまでの特許情報プロフェッショナル向けのアドバンストコースに加えて、学生向けの「ベーシックコース（現：スチューデントコース）」が創設されて大変嬉しく思ったことが強く記憶にあります。もちろん、大学勤務の頃は学生に受験を勧めました。残念ながら、自分のゼミ学生以外は、あまり多くの学生は受験しなかったのが心残りではありましたが…。

学生には、他に、INFOSTA（情報科学技術協会）の検索技術者検定（旧：情報検索基礎能力・応用能力試験）も受験するよう、勧めました。こちらのほうは、学部学生の授業科目と直接関連づけることができたため、かなりの学生が受験し、特に基礎能力試験（現：検索技術者検定3級）は相当数の学生が受験し合格しました。さらに、院生のみならず学部学生からも応用2級の合格者が出て大変嬉しく思いました。

思いがけなくも2015（平成27）年度の特許情報普及活動功労者表彰で長官賞を受賞させていただきました。これは、企業勤務のころ、インフォスペシャリスト交流会、その特許分科会、各種セミナーの講師等、また大学勤務のころは政府関係や知財関連団体の活動に参画させていただいたこと、さらに、特許検索競技大会の実行委員会に、発足当時より足掛け8年間参画させて

いただいたことが受賞を賜った理由だろうと思っています。受賞させていただき、多くの方からお祝いのお言葉や花束などをいただき、本当にありがたく思いました。実際の仕事面では特に変化はありませんが、研究会やセミナーに講師として招かれると、講師経歴に受賞のことも併せて紹介いただくことが多く、改めて名誉なこととありがたく思っています。

現在は、特許情報・情報分析の研究会を中心として、特許製品・技術活用などのさらに幅広い分野にわたる知財研究会の活動に力を入れています。同時に、PIUG<sup>2</sup>やIPI-ConfEx<sup>3</sup>等の海外の学会・コンファレンスへの参加と交流にも力を注いでいます。これら海外の学会には、日本からの参加者は少ないので、これからはどしどし参加して、幅広い交流と視野を深める機会となってほしいと思っています。なお、今はPIUGの日本での活動のボランティアもしています。このような「草の根運動」も含めて、今後も知財情報に少しでも貢献できるよう、活動を続けたいと思っています。

■ 中村

まず最初に、この度の企画を通してこのような貴重な機会をいただきましたこと Japio に御礼を申し上げたいと思います。せっかくの機会をいただきましたので、私がこれまで携わってきた技術情報職を通して私の意識してきたこと、特許情報調査に対する思いを皆様にお伝えしていきたいと思っています。

1. 特許情報業界でのこれまでの活動の紹介

プロフィールでもご紹介の通り、私の所属する旭化成株式会社では、調査強化を目的として1998年に全社一極集中の情報調査セクションが知的財産部の中に発足致しました。

私はコアメンバーの一員として同セクションに異動し、初めて情報調査の世界に足を踏み入れることとなりました。

その後20年あまりこの世界一筋でやって参りました

- 2 Patent Information Users Group
- 3 International Patent Information Conference & Exposition

が、当時私の中で課題として認識された「当社の調査面での長所を生かしつつ社内の技術情報調査基盤を構築すること」、「調査結果の有効活用」につき様々な取り組みを行って参りました。その活動の結果が現在の当社技術情報基盤となっております。

元々当社研究者の持つ高い調査モラルを生かしつつ、調査の専門家集団である当グループのサーチャーの育成を行い、研究者とサーチャーが連携してそれぞれが必要な調査を進める体制を作り上げました。当時、当社のサーチャー人財育成が発展途上であったことが、私の中でサーチャーの育成活動への関心を高める結果となり、その後の知的財産協会での講師、特許検索競技大会の実行委員をお引き受けするドライビングフォースとなりました。

調査結果の有効活用につきましては、当グループ発足当時は我々の実施した特許調査結果のほとんどが紙ベースの管理となっており、関連する重要特許に関する戦略情報（当社技術に対する当該特許の技術的、重要度の位置づけ、対応策）がオンタイムでは引き出せない状態、極めて属人的管理であったと記憶しています。

その後特許公報の電子化に伴い、各部署が所有する基幹テーマに関する特許情報をローカルデータベース化し、これらデータに関連情報のタグ付けを行った「戦略データベース（Strategic Data Base：SDB）」を全社に対し提案、普及させました。当グループから配信している継続調査（SDI）結果にテーマにおける重要度や技術領域のタグ付けを行うことによって調査結果の共有化、スムーズな結果へのアクセスが可能となり、重複調査の無駄が排除されました。

このSDBはその後の当社特許情報管理の礎となり、その後システムは形を変えていきましたが、現在でも当社における他社特許管理手法のスタンダードとなっています。このSDBに関する取組は社外のような場において発信をさせていただき、業界において大きな反響、ご意見をいただきました。

技術情報調査結果の活用の一環として特許情報解析の重要性に着目、解析のスキル向上に関する活動も継続して行ってきました。2000年前半の時代はまだまだ解析ツールが発展途上であったこと、当社の中でもまだ特許解析をR&D向けに細々と行っていた時代でしたが、



## 中村 栄

旭化成株式会社  
研究・開発本部 知的財産部  
知財戦略室長  
プリンシパルエキスパート

- 1985年4月 旭化成株式会社に入社、大阪府高槻市繊維基礎研究所に勤務
- 1989年1月 同社知的財産部に異動、その後知財リエゾン業務に従事
- 1998年10月 同社知的財産部に技術情報センター（後の技術情報グループ）発足  
同センターに異動 2009年4月よりグループ長
- 2017年10月 旭化成グループ プリンシパルエキスパートに就任
- 2018年4月 知的財産部に新設された知財戦略室長に就任（技術情報グループ長兼務）

### （主な対外活動）

特許情報検索能力評価のための実行委員会 委員長（2015～2017）

日本知的財産協会 C9A 特許情報と特許調査（実践）講師  
科学技術振興機構（JST）知的財産審査委員会第5専門委員会委員

この時の活動が現在の当社におけるIPランドスケープ活動に繋がってくる基盤となりました。これについては後章にてご紹介したいと思います。

## 2. 特許情報普及活動功労者表彰受賞を通して

こういった社内での試行錯誤の活動につき業界の皆様には様々な場で発信させていただいたことが皮肉なことに？「育成」という形で特許情報普及活動功労者表彰受賞に結びついたということだと思います。業界の皆様と築かせて頂いたネットワーク、様々な意見交換の結果が現在の私の宝であり、何にも代えがたいものと言えます。

本受賞につきましては、新聞紙上に掲載されたということもあり、当社経営陣にも当社の中での技術情報調査のプレゼンスを意識づける結果となりました。また、この後2017年に旭化成グループのフェロー、プリンシパルエキスパートに任命をしていただきましたが、本受賞がその任命の後押しになったと思っています。知財の、それも情報調査職がこういった専門職に任命されたことを通して、手前味噌ではございますが当社の技術情報調査モラルの高さを改めて認識した次第です。

プリンシパル就任後は、社内全体、特に経営層に対す

る影響力が格段に増しました。我々の次の活動の追い風になっていると感じております。

## ■ 酒井

スマートワークス株式会社・代表取締役をしております。酒井美里と申します。よろしく申し上げます。

私は1991年にセイコーエプソンに入社し、知財部門で出願権利化、研究開発本部で開発テーマ管理を経験した後に調査部門に出向しました。2005年に独立して以降、講習会や原稿執筆を通じた特許調査教育や、特許調査の代行業務、自社内における後進の育成、調査スキルのマニュアル化等を行っています。

調査部門に出向した当時は、特許調査のツールといえば誰もがまず思い浮かべるのがPATOLIS。大手企業を中心に社内データベースの構築が始まった時代でした。そのような中「調査のノウハウは先輩の技を見て盗むもの」「勘どころを教えることはできない」という意識も今より強かったですし、一部にはノウハウを抱え込んで自分だけの秘伝にする、といった風潮もあったように思います。

そのような中、当時の上司の勧めもあって、調査技術のマニュアル化、ノウハウの共有に努めてきました。

特許庁長官賞という栄誉ある賞をいただき「どうして?」「私などでいいのかしら?」と、今でも不思議に思うほどですが、2005年に前職を離れてからも、ネット上や論文誌等で特許調査に関する情報公開を続け、また、講習会や書籍を通じて検索技術の共有を行ってき



## 酒井 美里

スマートワークス株式会社  
代表取締役

1991年セイコーエプソン株式会社入社。知的財産本部で出願権利化業務に従事。1995年よりエプソンインテリジェンス出向。2005年同社を退社。スマートワークス株式会社設立。2007年特許検索競技大会優勝。2017(平成29)年度特許情報普及活動功労者表彰特許庁長官賞を受賞。

た点や、2007年の特許検索競技大会で優勝後「特許検索業務そのもの」についても情報発信に努めてきた点などをご評価頂いたのではないかと想像しています。

この春に賞を頂いたばかりで、変化を実感する場面はまだ少ないのですが、「長官賞に値するよう、これからも頑張りなさい」とお声を掛けて頂いた事が何度かありました。そのような時は、非常に賞の重みを感じます。

## 仕事への取り組み方について

### ■ 事務局

特許情報普及活動の功労者として表彰されていることから明らかなおお、皆様はこれまで長い年月にわたり、特許情報とかかわってこられたかと思えます。今も活躍される皆様が、何をモチベーションや支えに活動を進めてこられたのかなど、皆様のこれまでの仕事への取り組み方について教えてください。

### ■ 菅原

私が仕事をする上で、大きな転機となったことは二つあります。

1995年当時、当社は、日本知的財産協会、ライセン委員会をはじめとする各種専門委員会活動に参加していましたが、情報委員会には参画していませんでした。当時の上司に、情報委員会にも積極的に参加して、知的財産情報への取り組みを強化していくべきではないかと提案したところ、上司から、「それでは貴方に行ってもらいましょう。」とのことになり、対外活動をはじめることになりました。これが一つ目です。その後、情報検索のユーザーとしての立場から、ベンダー各社との意見交換や日本の特許庁施策への提言等、会社の中だけでは経験できない視点での活動を多く経験させていただき、活動の幅が大きく広がったと思います。また、各社の素晴らしい方々と巡り合うことができ、大いに刺激をもらいました。この活動が契機となり、さらに、その後の各種対外活動へ繋がっていくことになりました。

一方、社内に於いては、1997年10月に合併があり、



その後 2000 年には、情報調査部門のメンバーが、社内の各部署に散り散りになるという経験をしました。私も研究開発部門の研究所に異動となり、研究部門での新製品開発のための情報調査を行いました。それから数年が経過し、このままの状況では、会社としての情報調査機能そのものが弱体化してしまい、消滅するかもしれないといった危機感が芽生え始めていました。2007 年 4 月、知的財産部に新部長が赴任したことを契機に、この状況を説明し、なんとかできないかと相談を持ちかけました。これが二つ目です。新部長は、「情報」の必要性・重要性をよく理解しており、これをきっかけとして、分散型組織から集中型組織への変更を即断しました。この組織は全社の情報調査機能を担い、すべての調査をワンストップで提供することを狙ったものでした。新組織を作るにあたっては、将来のあるべき姿、現状の課題、方策の決定、チーム・人材配置まで、メンバー全員で議論を尽くすことを行い、2008 年 4 月、これらの検討を終え、「情報調査センターユニット」として発足することができました<sup>4</sup>。

私がこれまでの社内外の活動に取り組むにあたり、心掛けていることは、①与えられた業務にはベストをつくす、②機会を捉える感性を磨く、③部内、社内の動き、他社、世の中の動向に敏感に、④タイミングの重要性、⑤相手に対する思いやり（ひと手間をかける）です。これらの積み重ねで、現在、あなたの強みと想っているところは何か？と問われると、「社内外ネットワーク（人

脈）・「なんとかすること（忍耐力）」・「ひらめき（企画力）」と答えています。

## ■ 都築

現在は、非常勤講師以外の仕事はほぼフリーでやっており、自分の気持ちをアクティブに保つことが大事なので「常に好奇心を持ち続ける」を心掛けています。また、仕事や自分の知識・能力の向上につながりそうなことには、できるだけ積極的に取り組むようつとめています。

また、特に社会に出て以降、自分に言い聞かせてきたことが大きく二つあります。第 1 は、「依頼された仕事は基本的に断らない。どうしてもできないときには、“それはできないけれども〇〇でよければできます”と代替案を出して相談する」ということです。第 2 は「人に接するときには、その人の良い面を見て付き合う」ということです。どんな人でも、よほどの場合を除いて、どこかしら良い点があります。なので、その人の良い面を見て接すれば、相手も、私に対してはその人の良い面で接してくれる、と思います。もっとも、私は、社会に出てから、あるいはそれ以前も、人間関係には恵まれていたと思います。心から感謝しています。

仕事を続けられたのは、何といても夫をはじめとする家族のお陰です。また、遠く離れて住んでいる実家の両親にも言葉に尽くせぬほど助けてもらいました。もしかしたら私の子供たちは、仕事で母親が昼間家に居ないことに不満だったかもしれませんが、実家の母に時々来てもらったり、子供が小さい頃は、パートタイムのお手伝いさんをお願いするなどして、何とか乗り切りました。子供たちも、小学校の高学年ぐらいになると、たまに私が仕事を休んで家に居ると「お母さん、仕事は大丈夫なの？」と心配してくれるようになりました。上の娘が「大きくなったら何になりたいか」との学校の作文で、「きちんとした仕事に就きたい」と書いたことがあり、私が仕事をしていることを娘に認めてもらった、という気がして、とても嬉しく思いました。

今の自分があるのは、上に記載しましたように、何といても家族の理解と応援です。あとは、やはり周囲の人間関係に恵まれたことです。特に、社会に出てからの最初の会社での仕事や人間関係は、大きな価値があった、

4 情報管理 (JST) 2009.6 月号 「企業内情報調査部門の組織再構築 ～三井化学(株)知的財産部・情報調査センターユニットの活動内容～」

と今でも思います。

最初に勤務したのは丸善株式会社ですが、ちょうど海外データベースサービスを手掛け始めた頃で、そのための部署として MASIS センターが設立されました。海外情報を手掛けた先人的役割を担っていたと思います。東京に少し遅れて関西でもセンターが設けられ、私はそこで働き始めました。新しいことを始める、という気概に満ちていて、職場の上司、東京のセンターで働いている先輩等々、多くの方々から指導いただき、充実した日々を送ることができました。それらはその後の自分のかけがえのない財産です。

自分にとっての転機は転職だった、と思います。

最初の転職は、データベース提供会社から特許事務所への転職でした。特許事務所では、特許の実務を学び、出願に関係した調査依頼なども担当させていただき、大変勉強になりました。次の転職では、特許事務所からデータベース業界に戻りました。このとき、私の所属は東京本社で月曜～木曜は東京勤務、金曜日は大阪支所で勤務する、という、当時の女性としては特異な勤務方式でした。これは、私の自宅が関西にあり、家族が関西在住であることを考慮してくれたのだと思います。これで私の知人・交流の範囲は大きく広がりました。その後、勤務先企業の吸収・合併を経たのちに、大阪工業大学の知的財産研究科で勤務することになりました。大学で勤務したことにより、それまでとは違った業界の方々ともお近づきになれ、さらに世界が広がりました。

また、大学への“転職のスキマ”に、はじめて IPI-ConfEx という海外で開催される特許情報の学会に参加しました。これは、データベース提供会社に勤務してい



た頃に、米国から出張してきた Ron Kaminecky 氏から、その学会について教えてもらったことが発端です。その後、大学で勤務しつつ、春休みの授業の無い期間に、IPI-ConfEx に何回か参加させていただき、その活動を拡張した形で、今は、米国で開催される PIUG にも例年参加し、時々発表もしています。また PIUG の日本での活動にもボランティアとして関わっています。

海外特許情報や関連学会の情報提供はこれからの自分の活動の中心の一つだと思っていますので、このような機会を得ることができたことは、本当に有難いことだと思っています。

## ■ 中村

### 1. 技術情報調査の世界へ

冒頭に紹介させていただいた通り、1998年に当社に一極集中の技術情報調査組織を構築する、という計画が進められた際、組織化のプロジェクトに参画することになりました。全社技術情報調査セクションとしてのミッションを策定し、研究者へ提供するサービス内容を構築する、専任サーチャーモーターから育成する…まさにゼロからのスタートとなりました。これは私にとって非常にハードルの高い業務ではありましたが、振り返ってみるとこの時が私の会社生活におけるターニングポイントになったように思います。ハードルの高い業務であったゆえにいろいろと試行錯誤がありました。ただし、当時は正解のない世界でもあったかに思います。幸いなことに当時の上司は未熟な(?)私に自由闊達に本件に対して取り組むことを許してくれました。自分のやりたいことを1つ1つブロックを積み上げるが如く都度達成感を持ちながらやれたこと、このことが仕事を継続する原動力になったのではないかと考えています。

### 2. 仕事を行う上で一貫して心がけてきたこと

私がこの世界に入って感じたこと、これは企業によって異なる考えをお持ちかと思いますが、技術情報調査業務は現場にとっては掛け捨ての保険のようなもの、今日やらなくても死ぬことはないが、いざ問題が起きた時にはなぜやっていなかったのか、というものであると思います。よって、現場側の優先順位がやや下がりがちな業



務なのではないかと。元来調査が重要だと言われていた企業風土であったにも関わらず、です。

最初にご紹介した社内における情報基盤の構築、戦略データベースの構築提案の場面では、とにかく人の意識を変えさせることの難しさということを思い知らされました。

私はこれら取り組みに対して、決してあきらめない、逃げないことを信条としてやってきたつもりです。結果が良くも悪くも最後までPDCAを回してやり切ること。どんな時でも絶対に逃げるための言い訳はしない、これが私のポリシーです。新しいことに取り組むということは、人の意識を変えること、ここには大きなエネルギーが要りますし、常にゴールをイメージしていろいろと考え、次々と手を打っていく必要があります。そして何よりも自身が変化を恐れてはいけません。自分を変えていなければ相手を変えることもできないのです。

### 3. 感謝していること ~私を支えてくれたもの~

こういった活動を通して、私は常に社内外の人脈を作ること、自身のシンパを作ることをご心掛けてきました。1つの業務を推し進めていく際に「人の力」は本当に重要です。我々の仕事は特に設備を必要とする仕事ではありません。腕一本、まさに人間力が勝負です。世の中には様々な能力を持っている人がいます。多くの人と接点を持ち、多くの人から多くのことを教えてもらうこと、そういう人たちに都度助けてもらうことが大切です。ちなみに、それらの人は社内外、上席者、部下かかわらずすべての人たちが対象であることを申し添えておきます。

冒頭の「ゼロからの出発」ゆえにこういった人たちとのつながりを獲得できたことが私の宝であり、私に力を貸してくれた人たちに感謝しています。

#### ■ 酒井

自分にとっての転機でもあり、かつ感謝していることは以前の上司との出会いです。月並みな表現ですが、部下それぞれの適性を見極め、とりわけ若手の部下には「将来的にはこういう事が必ずできるはず」と、折りに触れてキャリアプランを示してくれる方でした。私が言われ続けたのは「情報の入手と咀嚼、発信」と「人を育てる」ということ。ほとんど現在の仕事そのままなので、怖くなるくらいですが（笑）。

20年ほど前から「職場に酒井がいるだけでも重宝だが、組織としては人を育てて、酒井を10人に増やして欲しい」と言われていました。その後退職・開業しましたので、組織内で人材を育てて欲しいという願いには応えられないままですが、それがかえって「何かの形で、知財人材の育成に関わっていきたい」という原動力に繋がっているのかもしれない。

一貫して仕事で心掛けている事は「自我を弱める」事です。これは「常に柔軟性を持つ」と言い換えられます。

現在、主な業務は代行検索と知財人材育成のふたつで、どちらも様々な業種・立場の方に関わる仕事です。多くの方々に接する中で「自分が『良い』と感じる事柄であっても、すべての業種・立場で普遍的に『良い』とは限らない。」と感じる場面に、何度も遭遇してきました。

一例として、特許保証（補償）を求める完成品メーカー





と、求められる部材供給側では、一見同じような特許調査でも全く見方が変わってくる、といった例が挙げられます。このような場面で、自分の経験を踏まえたお話をするのは勿論ですが、価値観の押しつけにならないよう、また「依頼者の方の求めている事」「依頼者の利益が最大化できる方向性」を考えていく上でも、自我を弱め、柔軟な思考をしよう、と常に心がけています。

## 女性活躍について

### ■ 事務局

特許情報普及活動功労者表彰の特許庁長官賞を、4年連続で女性が受賞していることからわかりますように、特許情報業界は、女性が最前線で活躍している業界なのではないかと思っております。もちろん先の質問で回答いただいたように、皆様が積極的かつ前向きに取り組んでこられた結果であるとの側面も多分にあるのだと思いますが、特許情報業界は、女性にとってどのような業界であるのか、なぜ女性が活躍できるのかについて教えてください。

### ■ 菅原

少し（かなり？（笑））、古い話になりますが、私が入社した当時の三井東圧化学では、「特許調査業務（特許部）」という職種で、学卒女子の新卒採用枠がありました。私自身は、「特許調査」というものは、ほとんどわかっていなかったと思いますが、大学時代の科学の知識が活かせること、また、新しい技術に触れられること、経験を積みば長く勤められること、が魅力的であったことから、採用試験を受けたことを思い出します。入社してみると、この職種で特許部に採用された同期は4名、先輩は5名がおり、いずれも女性でした。また、その後、数年にわたり、女性の後輩が2名ずつ入社してきました。

これらの人事採用については、当時の特許部幹部の方針によるところが大きいと思います。昭和55年以降、特許調査業務は、技術系学卒女子を活用するとし、年間の活動実績をまとめた特許年報においても、「抵触判断、

特許性判断等の特許業務遂行上、特許調査は最も重要な業務であり、特許上の判断の基礎となるものです。また、特許情報を有効に活用することは研究開発上、特許戦略上、重要なポイントとなります。そのため、特許部では、特許情報の的確な収集、自他社特許の解析・加工を行い、特許上の判断の基礎とすると共に、研究・開発パートへ提供しています。今年度の技術系学卒女子の活動実績を以下に示します。」と、社内の経営層はじめ全社の理解も得ていました。

では、なぜ、女性だったのでしょうか？当時、これらを推進した上司は、「技術系（薬学、生理学、化学、化学工学、栄養学等）の女子学生は優秀な人が多く、きめ細かな作業においても忍耐強く、特許調査には男性よりも適している。女性は、結婚して、出産すると仕事を辞める人が多いが、これはもったいない。この仕事は、化学合成のように薬品を使うこともないので安全だし、専門性を長く続けられるからね。」とっていました。この当時は、他社と情報交換会などもさせていただきましたが、当社だけでなく、他社においても女性の方が多く活躍されていたと思います。このように、会社方針や社会的要因で、この業界では女性が活躍してきたものと思われませんが、現在は、当社でも男性が活躍する職場となっており、大きな男女差はないように思っております。

一方、ここからは、少々脱線しますが、最近の私の関心事として、「ジェンダー・イノベーション」があり、この一環として、脳科学における男女差について、講演を聞く機会がありました。東北大学大学院医学系研究科附属創生応用医学研究センター大隅典子先生によると、「女性は、左脳と右脳をつなぐ脳梁が男性よりも太く、



男性は半球内（左脳または右脳）のコネクションが、女性は半球間（左脳と右脳）のコネクションが強い。これは、男女の情報処理に違いがあることを示しており、女性は男性よりも、より多くの情報に気付き、より多くの情報を基に意思決定をする。また、女性は言語野が優れており、社会性に優れていること等の脳機能の違いがある。」とのことでした。一部の先進的な企業においては、これらの男女差を理解した上で、適材適所に配置することをおこなっているところもあるようです。これを聞いた時、「情報調査の仕事は、もしかしたら、これらを取って代わっていたのでは？」とも思え、女性が活躍している理由のひとつと言えるかもしれませんね。

## ■ 都築

特許情報の仕事では、「検索についてのスキル（検索システム・DB 選択・検索方法と結果の理解についてのスキル）」「特許 / 特許制度に関する知識」「技術についての知識」「英語力」「コミュニケーション能力」が必要だと思います。これらの能力のどれをとっても、男性と比較して女性が不利な点はありません。「コミュニケーション能力」については、“女性向き”の印象があるようにも思います。

調査には、研究者や企画・営業に携わる方々が、自分に必要な情報を調査するいわゆるエンドユーザー型と社内・社外の調査依頼を受けて調査するサーチャー型の調査があります。依頼により調査する「サーチャー型の調査」の場合には、「コミュニケーション能力」は必須ですし、また、サービス精神というか、補助業務を丁寧にやる、という感覚が必要です。その点、一般的に、依頼調査をこなすのは、女性には向いていると思います。また、どの企業・組織でも昨今は、少なくとも一部はエンドユーザー型の社内体制を採用していると思いますが、その体制を有効に進めるには「検索についての社内説明会」や「説明会後の困ったときの相談窓口」が必要になります。エンドユーザーにとっては「女性の担当者だと困った時にHELPを求めやすい」などのソフトなイメージがあり、女性は歓迎されると思います。

一方で、上記の「技術についての知識」に関しては、理系分野には男性が多いという現実がありますが、理系



分野を学んだ女性にとっては、特許情報分野は自分の知識・経験を活かせる貴重な場だと思います。また、情報の世界は、特許あるいは技術分野だけでなく、市場調査やニュースの解析等、大きく深く広がっています。ですので、理系出身者のみならず、文系出身者も、自分の「コミュニケーション能力」「サービス精神」を活かし、業務の中で専門知識も学びつつ活躍している女性は多数おられます。情報関係の業務は女性には良い仕事だと思います。

とはいえ、私がこの業界に入ったころ、1980年代の前半には、特許調査に関わる方々の圧倒的多数は男性でした。私が担当していた特許調査関係のセミナーの受講者も、大半は中高年の男性で、女性はごく少なく、また、女性の場合は「タイプライターが打てるからキーボード操作も楽にできるだろう」という理由で会社から派遣されている方が結構おられました。

そのうち、特許検索関係のセミナーにも技術に強い女性が参加されるようになり、徐々に様変わりしましたが、それでも、「特許」と名のつくセミナーでは、今でも技術に強い男性の参加が多いように思われます。

他の業界と比べて、特に特許情報業界が女性向き、ということではないと思います。ただ、上述のように、性別による仕事のしやすさの差がほとんど無く、女性でも問題なくこなせる仕事といえます。また、「依頼やHELPを求められる立場」での仕事という側面があり、「サービス業的」「縁の下の力持ち的」な部分が必要で、女性の場合はサポート的な仕事を得意とする人も多い、という面もあると思います。そういう意味で、特許情報業界は女性が活躍しやすい場といえますが、男性が活躍

しにくいということではないと思います。

## ■ 中村

### 1. サーチャー業務に対する適性について

特許情報の業界、特にサーチャー業界に身を置いて感じていることは、女性の皆さんがとにかく前線で活躍されています。ただしこれは、女性だから活躍している、ということではなく、そもそもこの業務に配属されている女性の数が他業務に比べて歴史的に多いことによるのだと考えています。

サーチャー業務に関する適性（スペック）として、私は以下の点が挙げられると考えています。

まず第一に、技術に対する理解力が高いこと。新たな技術に対する興味を持てること。これがないと調査（検索）はただの言葉遊びになってしまいます。知財やデータベースに関する知識は当然必要ですが、これは後から学習することによって会得することが可能です。そもそも技術に対する興味を持たない人はこの業界ではやっていけません。

次に大切なのはコミュニケーション力です。この世界では情報の提供元と提供先の持つ知識の乖離が大きい。相手のニーズを把握するために話を良く聞く、相手の目線に合わせて論理的・判り易い説明ができることが肝要です。さらにこの業務は一種のサービス業務ですから、相手に対して細やかなサービスを提供するという気持ちを前向きに持てるかどうかクライアントの満足度を左右します。

あと、ベースのキャラクターとして、几帳面・真面目・

ごまかさないという点は必須要件かと思っています。企業の事業実施を左右する重要特許調査にはミスが許されません。結果をきちんと振り返る、何度もミスがないか粘り強く確認する、仮に間違いをした場合でもうやむやにせず、誠意ある対応ができる、そういった細やかさ、几帳面さ、正直さが必要であると思っています。

### 2. 女性サーチャーの活躍

本来女性の持つ細やかさ、几帳面さがこの業務に適しているとの判断で、この情報調査の世界は歴史的に女性がこの業務に配置される確率が高いのではないのでしょうか。ただ、女性の場合、結婚や出産といった私的環境の節目において、キャリアプランの見直しを都度考えていかなばなりません。これは現在の日本社会においてやむを得ないことかと思えます。この業務はベースとなるスキルをしっかりと獲得していけば、長く継続をし、キャリアアップをはかっていけると思えます。そういった業務であるがゆえに女性もキャリアが途切れることなく、その能力を発揮することができます。

社外で講演をさせて頂いた際に女性サーチャーの皆さんからこういったキャリアアップに関する相談を受けることがあります。皆さん自らのキャリアアップに悩んでおられます。こういった相談をされるのはやはり女性の方が多い。そういう時には、皆と同じことをする必要はない、個人や組織の環境に応じて自らの貢献できることは必ずあるはず。モノにするのに時間がかかる業務なので、あきらめずに継続をしていくこと、自分の置かれている環境に応じた貢献を考えていくよう、お答えをしています。このあたりを「覚悟をもって」取り組んでいる方々がまさに業界で活躍されているのではないのでしょうか。

### 3. この業界で活躍するために

最初スペックの話に戻りますが、男女関係なくこういったスペックを持つ方々は皆この世界で活躍できるということです。

さらに、これらベースのスペックに加え、世の中の動きに目を向け、新しいことを取り込み（常に提供される情報やツールは変化している）、自らも常に変化、進歩していくこと、これらを継続的に行っていく人、柔軟



に適應していける人がこの業界で活躍できるのだと思っています。

私自身も常に5年先のことを考え、そのために今やるべきことは何か、ということ意識してやってきました。専門性の高い仕事ですので、明日から新しいことをやれ、と言われてもすぐにできるものではありません。常に世の中の動きを読んで、次の時代に何が来るのか、そのためにこれから何をやっていくのかを考えていくことが大切です。所属する組織の環境によってもやるべきことは異なります。

結局男女関係のない話になってしまいました。これからこの業界を取り囲む環境は更に変わっていきます。若手の皆さんにはぜひ上述のことを意識して次の世代の業界を盛り上げていただきたいと思います。

## ■ 酒井

特許調査、特許情報の仕事は他と比べて、比較的自分の裁量でスケジュールを決めやすい、と感じています。上の子供は既に成人していますが、就学前は保育園の閉園に間に合うよう、17:30には必ず職場を出ていました。特許調査の部門に異動していたので何とか時間のやりくりをしていましたが、出願権利化や研究部門でそのようにできたか？という、想像の域ではありますが、やはり調査部門よりは時間調整が難しいだろうな、とは感じます。

基本的に「男性だから」「女性だから」という事はないと思います。資質の差を感じた事はほとんどありません。ただ「働きやすさ」の点でいうと、本人の希望次第で子育て期を乗り越えられ、女性が働き続けやすい職種、とは言えると思います。また、これは皆さん感じられていると思うのですが、転職市場においても知財から知財へと、専門性を生かした転職をされる方が比較的多いですよね。そのように、男女問わず長く続けられる専門職であるために、活躍される女性が多いという結果になっているのではないかと思います。

少し視点を変えてみると、私は教育系の女子大出身でして、同窓の先輩には中学・高校の教員をされている方が比較的多いのです。長く教職をつとめられた先輩からは「公立学校の教員は昔から産休制度等が充実していて、



職場復帰もできた。その後も夢中で働いていて、定年を迎えた。」というお話を多くお聞きします。「専門職&子育て期間を乗り切る」という点で、仕事を長く続けられた理由は共通しているな、と感じます。

## 特許情報業界の現状や今後の課題について

### ■ 事務局

皆様のご活躍により、ますます盛り上がりを見せる特許情報業界ですが、一方で、国内出願の減少と中国をはじめとする外国出願の増大、IoT、AI 関連技術による第四次産業革命等、特許情報を取り巻く環境には大きな変革が生じており、業界全体として今後、考えていくべきことも山積みの状況かと思えます。特許情報業界の現状や今後の課題について、皆様の率直なご意見をお聞かせください。

■ 菅原

現在、IoT、AI 関連技術による第四次産業革命が進行中であると言われており、内閣府「総合科学技術・イノベーション会議」の「統合イノベーション戦略の策定」においては、強化すべき分野のひとつとして、「あらゆるシーンでの AI 活用（AI 技術）」を掲げています。本会議議長の安倍内閣総理大臣は、「Society 5.0 時代を見据えた（IoT、AI 関連技術の）人材の育成も、喫緊の課題であり、人工知能、ビッグデータなど IT 技術、情報処理の素養は、もはやこれからの時代の「読み書きそろばん」と言えると思います。」とコメントしています。

また、昨年、特許庁においても、「特許庁における人工知能（AI）技術の活用に向けたアクション・プランの公表」がなされ、庁内事務処理関係から始め、順次、特許分類付与、先行技術調査、特許登録可否の判断までも、AI 技術の活用が検討されています。宗像特許庁長官は、2018 年年初の挨拶にて、「特許事務 892 の業務全てを検討し、AI の適用可能な業務を抽出した上で、今年度、出願人からの問合せ対応などの 6 業務で検証を実施しております。AI を活用する分、人にしかできないことに注力する。これにより、さらに充実したサービスを提供していきたいと考えています。」としています。

このように、AI を活用する動きは、目覚ましいものがあります。特許情報業界においても、すでに、商用 DB の一部には、AI を搭載したシステムが出現してきており、AI の進歩から、目が離せない状況となっています。

これまで、特許調査従事者（サーチャー）の要件としては、「調査スキル」、「知的財産スキル」、「技術・事業スキル」、「コミュニケーションスキル」が重要であること（2011 年度 INPIT 調査研究「特許調査従事者の現状と今後に関する調査研究」）から、サーチャーの評価を目指す「特許検索競技大会」では、この調査結果を反映し、上記 4 つのスキルのうち、「コミュニケーション」を除く「調査」「知的財産」「技術・事業」のスキルを評価するものとしていました。もちろん、企業や調査会社などにおいては、サーチャーの業務範囲もそれぞれ異なっており、これらの基本的なスキルに加え、より高度な業務スキルを習得している方々も多くいることと思



ます。

しなしながら、AI の進歩に伴い、サーチャーが果たすべき役割も大きく変わろうとしています。宗像特許庁長官も言われていた「人にしかできないこと」が、サーチャーとして何であるか？を考えていかなければならないと思います。個人個人が変わっていかねばならない場面も出てくるでしょうし、組織としても業界としても変わっていかねばならないこともあるでしょう。この大きな課題に対し、特許調査業界全体として、知恵を集結して、対応していくことが重要であると考えます。

■ 都築

特許を含む資料調査の手段としてデータベース検索が調査の主流となってからも、しばらくは、調査担当者の役割は、データベースや既存の資料を対象に「既存の情報を探す・見つける」ことが仕事とされ、それ以上の期待はさほどなかったように思います。しかし、昨今は、一般的な動向調査の場合でも、調査担当者は、単に調査結果だけではなくアイデア・提案も求められることが多くなりました。

10 年以上前、パテントマップが登場した頃は、研究者や開発者は「何か新規開発や新製品のアイデアを出してほしい」、上司は「パテントマップを出せば何かわかるんじゃないか」と言い、調査担当者は「具体的な目的を決めてもらわないとマップも作れない」というお互いの“期待のすれ違い”の話をしばしば耳にしました。その頃と比較すると、現在は、情報関係のツールの機能も、また、情報を取り扱う側の知識や技術も格段に進歩し、

“期待のすれ違い”も少なくなったように思います。

データベースの使い勝手は各段に進歩し、ここ数年でAI技術も調査の分野に取り入れられるようになりました。こうなると、情報担当者の役割はどうなっていくのでしょうか？もちろん、単に調査するだけでは不十分で、付加価値が大変重要になります。

そこには「調査結果そのものについての所見・意見・簡単なコメント」のみ期待されていた時代から「調査結果から何がわかるか」「調査結果そのものには含まれていない、しかし、調査結果に基づく新たな提案が欲しい」という期待へと大きく変わっています。また、調査担当者の側も「調査をする」「調査結果を提出する」だけではなく「分析・提案する」ことへの意欲が大きくなったと思います。「分析・提案」は、仕事としても面白いです。これからは、業界動向・ビジネス情報も踏まえつつAI技術も取り入れながら調査担当者個々が「うまい発想術」を鍛えて伸ばすことが大事だと思います。

データベースあるいはWeb上の情報源を扱うことは大変敷居が低くなりましたが、一方で、特許調査を含めて、「本格的な調査の価値の認識」が薄れてきている印象があります。誰でもとりあえずは扱うことのできるデータベースやWeb情報源が豊富にある現在、調査手法を磨く、という地味な精進(?)にはあまり興味を持ってない時代なのかもしれません。そこから抜け出すためにも、また周囲からの期待に応えるためにも、ものごとを別の角度からとらえ、飛び地したところからの発想術を磨く必要があると思います。

今後、特許情報業界がさらに発展していくためには、後に続く方々に、仕事が面白いと思ってもらえることが



ポイントだと思っています。そのためのさしあたってのキーワードは「人脈」だと思います。社内・社外を問わず、いろいろな場所に出かけて積極的に発言し情報を提供・提案し、人のつながりを広げていってもらいたい。今はAIが注目されていますし、話題づくりも含めてちょうどいい時期かもしれません。また周囲の関係者は、そのような活動がしやすいような環境を工夫してあげることが大事だろうと思います。

## ■ 中村

### 1. 特許情報を取り囲む環境

企業サーチを取り囲む環境はここ数年で大きく変化してきているといえます。

まずは中国をはじめとする外国文献の大幅増加。さらには、企業の業種が多様化、技術領域のボーダーレス化が起こり、今まで自社で取り扱ってきた技術領域外の特許情報も調査対象となってきています。大量の特許情報を相手に必要な情報を残しつつ、内容精査に耐えうる情報量に絞り込むことには困難を伴います。このことが結果のチェック(スクリーニング)負荷の大きな要因となっています。

サーチャーが今まで培ってきた「検索テクニック」を駆使することによりこれらの問題を解決していくことが難しくなってきているのではないのでしょうか。

### 2. デジタルトランスフォーメーション ～人工知能(AI)と向き合う～

このような環境の中、特許情報の世界にも調査の労力軽減を主な目的として人工知能(AI)の導入(検索、スクリーニング、自動分類など)が行われてきています。特許情報の場合、これらをどのような目的で抽出するかによってスクリーニングの基準が明確に異なってきますので、まずは一般的な技術動向調査、出願前先行技術調査や無効化資料調査にこういったAI技術が導入されてくると考えられます。ただし、AI判断の精度を出していくためには教師データによる適切な「学習」が必要であり、これらを行うのは人間の適切な判断力です。システムの機能に踊らされることなく、自らの業務に必要な形でシステムを導入し(導入することのみが目的ではな

い)、能動的にコーディネートすることが求められます。

デジタルトランスフォーメーション、ビジネスモデルやビジネスプロセスであったり、または各企業が提供するサービスや製品などビジネスに関わるデジタルへの変革のことですが、これらを自らの業務に取り込んでいくのは我々人間です。AIが発達してくるとサーチャーという業務は不要になるのでは、と言われることが多々あります。確かにいわゆる狭義のサーチャーは将来的にはシステムに置き換えられていく時代がくるかもしれませんが、しかし、いつの時代にもシステムを使いこなすのは人間です。逆にこういった新しい概念を取り込んでいけないとこの業界のこれからの発展はありません。時代に合わせた業務の高度化を行っていくことが必要です。サーチャーという職業がなくなるのではなく、職業の質が変わってくると考えた方が良いのだと思います。

### 3. これからの特許情報価値の在り方

特許情報は Information → Intelligence → Insight と進化してきているといわれています。【Information】に統計的な処理を加えて【Intelligence】とし、人が意思【Insight】を入れて、知識 Knowledge とする。

特定の戦略をもって出願されている特許情報は、その切り口によっては出願人の事業戦略をも明らかにすることが可能です。その場合には自分たちの携わっている足元の技術領域ではなく、競合、さらには顧客の技術領域まで情報を広く「俯瞰」する必要が出てきます。冒頭述べた外部環境の要因を超えてその情報量も多くなり、今までの個別の調査では対応できません。ビッグデータたる特許情報を様々な観点から「見える化」していくことが必要になるわけです。先ほど述べたAIの進化もこの「見える化」に貢献することが期待できるかと思えます。

これら見える化された特許情報をマーケット情報と合わせてみていくことにより、我々が従前意識していたR&D戦略だけでなく、事業戦略、経営判断にも有益な知見が与えられます。これが昨年あたりから日本でも注目されている、いわゆるIPランドスケープ(IPL)であり、こういった取り組みを現在各企業がこぞって強化しています。

誤解してはならないのは、IPLの本質は特許情報を見える化するところではありません。これらの情報を介し



て事業部門や経営層と戦略に関して議論しあうこと、まさに「意思」を吹き込むことが大切なのです。特許情報がこういった戦略構築の架け橋、きっかけになること、情報業界にいる者としては自身がこれらの提供元として新たなステージに立っていることを認識すべきかと思えます。サーチャー自身も能動的にその場にかかわっていく、そういった取り組みが普通に行われるようになってくるとこの業界は一層魅力のあるものになっていくと思っています。このブームが一過性に終わることのないよう、業界全体で盛り立てていけると良いですね。

時代の変化を後ろ向きにとらえず、自らがそれに追隨し、進化していくことを考えていってほしいと心から願う次第です。

#### ■ 酒井

日頃顧客と接する中で、最近は「ビジネスや技術開発に対して、より具体的に『使える』情報の提供」が好まれるようになってきた、という変化を感じます。

経営者層では「競合他社の開発組織と業務分担の分析」、開発者では「他社の良い着目点を特許から学ぶ」といった事例研究などに携わりました。このような情報調査を行うケースでは、特許情報のみならず、対象企業の近年の事業計画、組織、開発投資などに目を向ける事で、より現実に即した情報分析が可能になるのではないのでしょうか。

若手の人材育成について、時々思う事があるのですが、今の高校生・大学生は「特許情報検索」「サーチャー」



という仕事、知っているのでしょうか。たぶん、ほとんど知られていないような気がします。今、検索の仕事をしている方々も、おそらく「社会人になってしばらく経ってから、そういう仕事があるのだ、と知った」とか、「気が付いたらサーチャーになっていた」という方がほとんどなのかな、と。それではどうしても、スタートが20代後半とか30代、40代になってしまいますよね。

振り返って考えると、私が社会人になった頃は知財(特許)の仕事は知名度も低かったのですが、近年では製造業における人気職種のひとつに「知財部」が挙げられる事も増えました。

何が人気のきっかけだったのかな、と考えてみますと、知財紛争等の際「知財の仕事」が報道される場面が増えた事、小説、ドラマ等の題材にもなった事なども挙げられそうですが、いずれにしても「知っているからこそ、興味を持てる」という側面がありそうです。

現在、弊社では非常勤講師等の形で大学4校に関わっています。そこで、講義等を通じて「特許情報調査という仕事」を知ってもらう取り組みを始めたところです。

また「今まで知財と接点の少なかった方にも広く特許情報調査の仕事を知っていただく」「特許も面白いな、と興味を持っていただく」という目的で、日経クロステックの不定期連載をしています。少しでも興味をもつ、あるいは、頭の中のどこかに「特許情報」というキーワードが引っかかるだけでもいいな、と思っています。興味を持つ人が増えることで、この業界に多様な人材が流入し、既存の人材との化学反応も起こっていけば、特許情報業界の魅力も上がっていく、と思うのです。

## 特許情報業界のこれらに向けて

### ■ 事務局

貴重なご意見、ありがとうございました。特許情報を取り巻く環境の変化により、特許情報業界やその仕事自体にも大きな変化が起こりつつあり、そうした中で我々は、様々な形で、この変化に柔軟に対応していく必要があるということかと思えます。

最後の質問となりますが、その様な時代のこの特許情報業界において、皆様が今後、実現していきたいこと、また、そのために、弊機構 Japio を含む特許情報業界に期待することをお聞かせください。

### ■ 菅原

昨年度 Japio YEAR BOOK 2017 においては、「PI×AI (特許情報×人工知能)」が、また、同 2015 では、「ビッグデータの活用」が取り上げられています。このように、「技術情報」「権利情報」の2つの側面からとらえられていた特許情報が、「データ」としての活用される場面が増加しています。特に、AI を活用したマテリアルズインフォマテックスやバイオインフォマテックスの領域においては、国家プロジェクトをはじめ、各種企業においても研究開発が活発になっています。Japio におかれましては、本年 2 月、知財 A I 研究センター「(Japio 頂)」を設立され、特許・商標情報分野における人工知能技術の実用化に向けた研究・開発を加速されております。

一方、特許情報データを AI で活用するにあたっては、まだまだ解決していかなければならない問題も多くあると思います。例えば、オープンソースの活用としての「特許情報プラットフォーム」への大量アクセス・ロボットアクセス等をどうすべきか、また、特許文献から、化学物質情報の詳細を抜きだして活用する場合、表や図面の情報をデータ化するのか、さらに、すでに構築されている化学物質辞書データとの関係など、データの利活用を促進するための基盤構築をしていくことが必要であると思われる。この点に関しては、是非、特許情報のプロである Japio が、特許庁、独立行政法人工業所有権情報・





研修館、データベース作成機関と連携し、また、海外の状況も把握の上、より良い形を構築していただきたいと思いをします。

私は、現在、研究開発企画管理部のインテリジェンス G という部署で活動しています。インテリジェンス G は、「時代の流れや社会の変化を洞察し、未来（将来予測）からバックキャストして、今後の事業・研究開発の方向を示唆し、三井化学グループとして、獲得すべき技術提案とテーマ創出を推進する」ことを目指しています。特許情報も有用な情報源のひとつであることは間違いありませんが、これに限らず、様々な情報を複合的に入手、整理統合、分析解析、判断につなげています。ドライ情報とも言われる公知情報に加え、直接、有識者に会って伺うなどの足で稼いだウェット情報もより貴重なものであることも多く、情報入手源の差別化も重要です。また、これらを、自社の状況を踏まえ、評価できる人財を確保することが最も大きなポイントでもあります。

特許情報検索に携わってきた方々は、調査主題に対して、どのような情報を入手すべきか、どのように分析解析し、評価することができるか、を考えられる人財の集団であると思います。これらの技能をさらに、新たな専門領域と組み合わせることや、より大きな判断や提案をおこなう立場となるような育成も重要だと思います。「特許情報調査専門家×X」に挑戦することが、自身の価値をより高めることにつながると思います。Japio を含む特許情報業界においても、これまでの特許制度や特許情報調査の教育に加え、新たな時代に向かって、どのような教育体系を構築すべきか、を再検討するときでもあると思いますし、この点も、大いに期待する点です。

最後に、私たちは、特許情報に関して表彰を受けたものとして、特許情報はライフワークと思っています。今後の特許情報業界の発展に向け、常に関心を持ち、貢献できることがあれば、積極的に活動していきたいと思いをします。今回は、このような機会をいただき、誠にありがとうございました。

## ■ 都築

特許情報の流れが AI 技術の広がりや情報の多様化に伴い、以前にも増して大きく変わっている現状の中で、自分は今後何をやっていきたいか考えてみました。以下のようなことが特に“重点項目”になろうかと思いをします。

### ①研究会活動（IPI-Forum 等）への貢献と後継者の育成

関係している研究会・勉強会等、特に、現在、代表・事務局として関わっている知財情報フォーラム（IPI-Forum）をさらに充実・発展させ、良い状態で次世代に引き継ぎたいと考えています。また、この IPI-Forum 以外にも、いくつかの研究会・情報交換会・勉強会に所属させていただき、それぞれが私にとっては有益な知識が得られ、情報交換でき、人脈も広がる貴重な場となっています。これらの活動は今後とも継続し、同時に、新しい入会者の勧誘を積極的に働きかけたいと思いをします。

### ②学会活動等

日本で開催される情報シンポジウム（INFOSTA 主催）や日本知財学会年次学術研究発表会はもちろんのこと、米国で開催される PIUG Annual Meeting、ヨーロッパでの IPI-ConfEx 等の海外で開催される学会・コンファレンスにはこれからも継続的に参加し、できるだけプレゼン発表も続けていきたいと考えています。そしてそのような場で得た情報やニュースを所属する研究会に持ち帰り、話題の一つとすることにより、会の活性化につながりたいと考えています。

### ③情報発信

昨今では情報が巷に溢れています。多様な情報があることは大変ありがたいですが、一方で、未整理の状態での情報の量のみが拡大しているような印象もあります。皆

忙しくてそれぞれをあまり深く取り組めない場合も多く、自分にとっての“必要度”を素早く見極めできるよう、整理・集約された形の情報の有用性が高まっているのではないかと思います。自分自身のためにも特許情報分野の情報を活用し易く整理し、周囲の方々、たとえば研究会のメンバーにそれらをHP等を通じて提供できれば何よりと思います。

特許情報・知財情報の有用性は十分認識され、活用もされていますが、情報量のみならずサービスの種類も増えて、提供される各社さんは大変だと思います。こういう時代ではありますが、自社提供のサービスとは“別の立場”で、特許情報あるいは知財情報、さらにはビジネス情報や社会情勢を踏まえてのセミナーやコンサルティング的な内容も踏まえたイベントなどに期待しています。特許調査会社さんもいろいろあり、特許検索競技大会でも調査会社の方々は多数上位に入られており、レベルの高さを競い合っておられます。そのノウハウの一端を差し障りのない範囲で公開いただけるとありがたいと思います。

以上は、主として商用サービスを念頭に述べましたが、一方で、無料のJ-PlatPatは、特に中小企業のユーザーにとっては大変ありがたいものです。また、世界特許情報全文検索サービス（Japio-GPG/FX）も比較的安価で利用でき、世界主要国・機関の特許・実用新案公報を日本語・英語で横断検索可能などメリットもありますので、EspacenetやPATENTSCOPEとは別の切り口で、日本のユーザーが利用しやすい形で今後も発展してほしいと思います。



他の希望としては、自社の提供サービスのユーザーだけでなく、特許情報を利用する人たちが情報交換できる「場」の提供に貢献していただけると嬉しいと思います。企業体として情報提供等をされている場合は、自社のユーザー対象にユーザー会や研究を組織される話はよく聞きますが、自社のユーザー以外も対象に、となると、結構難しいものがあると思いますが、そこを何らかの形で柔軟にやっていただけるとありがたいと思います。

以上、いろいろ勝手なことを言いましたが、まずは自分が精神衛生上も良好な充実した日々を送ることが第一だと思いますので、私の場合、毎朝、気持ち良くその日を始めることから、ですね。

## ■ 中村

### 1. 特許情報業界のこれから

冒頭にて紹介をさせて頂いた通り、20年この世界で何とかやってきましたが、情報調査において、技術領域のボーダレス化、グローバル化、特許情報自体も中国を筆頭にその量を大きく増加させており、サーチャーやアナリストに求められるスキルの高度化、多様化がますます要求されてくるものと思われます。

情報調査の形はその姿を変えていっても、その重要性はますます高まっていくでしょうし、サーチャーには今まで述べてきたような幅の広いスキルが求められてくるでしょう。また、敢えてここで強調しておきたいことは情報調査のグローバル化に対応できる広い視野を持つことが必須となると思います。まだまだ国内のサーチャー、アナリストはドメスティックな活動に留まっていると思います。欧米、アジアをはじめとする業界人は情報調査にどう向き合っているのか、そのレベル感とともにしっかりと動向を見ていく必要があります。

環境が変われどもそれを支えるのは「ヒト」です。多様性のあるグローバルに耐えうる人材を育成していく必要があります。これからの情報業界を支える人達は我々ではなく、次の世代の人達です。私は若手の人たちに少しでも次世代の業界を考えるきっかけ、刺激を与えていきたいと思っています。

酒井さんが本稿で言われていた学生のサーチャー、アナリストに対する認識を上げていくこと、これも業界の



拡充のためには大変重要なことです。もっとこの業種の魅力を学生に伝えていくこと、学生が社会に出て普通にこの業種に就くことを希望するような形を作っていくことが必要です。

## 2. 業界に期待すること

Japio をはじめとする業界団体の皆様におかれましてはぜひこういった環境に適應する次世代の人財の育成における機会や仕組みを作っていくところに力をお貸しいただきたいと思っています。大学や官公庁、業界団体、ベンダー等々業界を支える組織の立場はまちまちだと思いますが、業種を超えてやれることがあると思いますし、業種間の連携も今まで以上に高めていく必要があるのではないのでしょうか。

学生に対する技術情報スキルに関する育成、グローバルな業界連携についても今まで以上に機会の提供を行っていく必要があると思います。欧米の業界団体の会合では日本の、特に企業からの参加が少ないことが懸念されます。企業におけるサーチャーはその所属組織の規模や会社の事情等々でなかなか海外連携の機会が与えられていないのが実情です。海外出張が難しければ国内でそういった場を設ける、今ではいわゆる Skype 会議等海外の業界とコミュニケーションを取る手段も多くあるはずです。外資系のベンダー等の協力を仰ぐ等してぜひこういった機会の構築をお願いしたいと思っています。

次世代のサーチャー、アナリストが世界と肩を並べてこれからの業界をさらに発展させていって欲しいと祈念しております。このたびはこのような貴重な機会を与您いただき感謝しております、ありがとうございました。

## ■ 酒井

今後の変化について、最近では 2 つの事を考えています。ひとつはチームワーク、もうひとつは海外との接点です。

まずチームワーク。特許情報調査、また情報分析の活用範囲が広がり、経営情報やファイナンスとの接点が増えていくだろう、と予想しています。その過程では、異分野の専門家とアイデアを出し合い、ディスカッションする場面も増えるでしょう。これまでの特許サーチャーは、単独、または特許専門家のチームによる仕事が大半でしたが、今後はチームで仕事をする力、チームで情報を扱う力が問われる時代がやってくる、と思います。私自身も今年度は「雑誌編集×特許」や「金融×特許」のチームに携わり、これまでにない発見がありました。

そして海外。近年は自分自身、海外特許庁、海外サーチャーに検索を習う機会が増えました。海外では特許業界でも Webinar (Web セミナー) が流行している、という背景も後押ししていると感じます。また、実際にリアルタイムで欧州のセミナーを受講していると、情報の量もさることながら「海外の動きの速さ」というものを感じます。

チームワークと海外、両者の共通点は「日本の特許村の外に出る」という事かもしれません。村の中にいると、日本語×特許、という共通言語で話すことができ、居心地は良いです。逆に、異業種も海外も共通言語ではない世界です。共通言語が使えない、という事で、お互いの知見を持ち寄る事もできるし、自分の知識を棚卸しし、相手が使いやすいように翻訳して提供する、という絶好の機会になる、と感じています。

Japio は例年の特許・情報フェア&コンファレンスでも海外特許庁や関連機関の招聘・動向紹介等をされていますよね。この時期に限らず、たとえば WIPO や EPO の Web セミナーに関連した発信等を行って頂くのもありがたいと思います。私自身も先日 WIPO の Web セミナーを受講した際「内容を日本語で教えてください」というお声を何人の方からいただきましたし、中には「海外の情報には非常に関心があるが、英語で 1 時間話を聞く、となると、急にハードルが高くなる」という方もいらっしゃいました。英語で 1 時間聴講する



前のワンクッション、英語のセミナーに慣れるきっかけとして「WIPO セミナー録画の、日本語字幕つき」などがあっていいのかな、と感じています。

## おわりに

### ■ 事務局

最後の質問では、既にこれまで様々な努力をしてこられた皆様の、さらなる向上心に頭が下がるとともに、その様な皆様にご期待いただいている特許情報業界の一員として、身が引き締まる思いがいたしました。弊機構 Japio は、Japio-GPG/FX を提供する特許情報事業者の立場で、利用者の皆様の視点に立ったより利便性の高いサービス提供を目指していくとともに、長年、この業界に携わってきたものとして、より広い視点に立ち、特許情報業界全体の普及・啓蒙・人材育成等を推進していきたいと思えます。

今回の対談を通じて、皆様がこれまで、どのような形で特許情報と向き合ってこられたか、また、特許情報業界の今後についてどのような思いをもっていらっしゃるか、ほんの少しですが、垣間見えたような気がいたします。聞けば聞くほど、さらに聞きたい話が次々に出てきてしまいますが、誌面の都合もありますので、今回の座談会は以上として、これ以降のお話は、今後様々な場でますますご活躍されるであろう皆様から、それぞれの場面で直接お聞きしたいと思います。

最後になりましたが、各種業務でお忙しい中、長期に

わたり今回の企画に協力いただきました 4 人の受賞者の皆様に、あらためてお礼を申し上げて、このネット座談会を終了といたします。

参加者の皆さま、本当に、ありがとうございました。

本文中、団体名と個人名は敬称略としました。